慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十三) : 『〔仮名書き法華経〕巻第七』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2013
Jtitle	三田國文 No.57 (2013. 6) ,p.27- 44
JaLC DOI	10.14991/002.20130600-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20130600-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介（十三）

――『〔仮名書き法華経〕巻第七』翻刻・略解題――

恋田知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『〔仮名書き法華経〕巻第七』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六―一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。(1)

本書は、漢訳の『妙法蓮華経』を仮名交じりの訓み下しにした仮名書き法華経である。常不軽菩薩品第二十から始まり、如来神力品第二十一、嘱累品第二十二、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四を収める巻第七のみを伝える。仮名書き法華経は、主に国語学の分野での研究蓄積があり、いくつかの伝本の存在が知られている。(2) 代表的なものとしては、鎌倉中期の妙一記念館本や元徳二年（一三三〇）写の足利学校本、近世中後期の月ヶ瀬本などがある。全巻揃いは現在のところ十種程度と少なく、本書と同様、一部のみを残すものや、法華経切として伝わるもの、訓読付きの版本なども含めると多数伝存する。諸本の系統については、妙一本の系統を引くものが多いものの、諸本により和文化の方法は一様でなく、語彙などに相違が見られるという。本書についても語彙や語順、左訓の表記など妙一本との共通が認められるが、独自表記も見受けられる。仮名書き法華経については、しばしば女性の読誦を意図したとの指摘もなされており、本書物群の生成・享受や伝来を考える上でも興味深いものがある。書誌については、以下のとおりである。

・函架番号　近ト―七二―チ
・形態　写本。一冊。仮綴。
・寸法　縦二九・七糎。横二二・二糎。
・表紙　本文共紙。鳥の子紙。
・首題　「妙法蓮華経（メウハウレンゲキヤウ）常不軽菩薩品（ジヤウフキヤウボサツホンダイ）第二十　七」
・尾題　「妙法蓮華経巻第七」
・丁数　墨付き四十五丁。
・本文　半葉九行。漢字平仮名交じり。字高約二二・五糎。
・奥書　なし。
・印記　一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打

つなど、読解の便宜をはかった。

注

（1）陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集　三弥井書店　二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町―物語草子論―』笠間書院　二〇〇八年）、拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」（徳田和夫氏編『お伽草子　百花繚乱』笠間書院　二〇〇八年）を参照されたい。

（2）中田祝夫氏編『妙一記念館本仮名書き法華経』影印篇上・下、翻字篇、索引篇、研究篇（仏乃世界社　一九八八～九三）、田島毓堂氏「法華経訓読史研究の諸問題」（『名古屋大学文学部研究論集』一二四、一九九六）、柴佳世乃氏「法華経の訓読―仙岳院蔵〈仮名書き法華経〉―」（『宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈』全注釈と研究』笠間書院、二〇〇一）、野沢勝夫氏『「仮名書き法華経」研究序説』（勉誠出版、二〇〇六）等参照。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げる。

なお、本稿は科学研究費補助金　若手研究（B）（課題番号二二七二〇〇九〇）、および基盤研究（C）（課題番号二五三七〇二五九）による研究成果の一部である。

【翻刻】

妙法蓮華経　常不軽菩薩品第二十　七

そのときほとけ、得大勢菩薩摩訶薩につげたまはく、なんぢ、いま、まさにしるべし。もし、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、法華経をたもたんものを、もし悪口・罵詈・誹謗することあらは、大罪報をえんこと、さきにとくところのごとし。その所得の功徳は、さきにとくところのごとく、眼・耳・鼻・舌・身・意、清浄ならむ。得大勢、乃往古昔、無量無邊不可思議阿僧祇劫をすきて、ほとけましくき。威音王如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師佛・世尊となづけたてまつる。劫をは、離衰となづけ、くにをは大成となづく。その威音王佛、かのよのなかにして、天人阿脩羅のために、法をときたまひき。聲聞をもとむるものゝためには、應せる四諦の法をときて、生老病死をわたし、涅槃に究竟せしめ、辟支佛をもとむるものゝためには、應せる十二因縁の法をとき、もろくの菩薩のためには、阿耨多羅三藐三菩提によせて、應せる六波羅蜜の法をときて、佛慧を究竟せしめたまひき。得大勢、この威音王佛のいのちは、四十万億那由他恒河沙劫なり。正法よに住せし劫數は、一」（1ウ）

閻浮提の微塵のごとし。像法、よに住せし劫
數は、四天下の微塵のごとし。そのほとけ、衆生を
饒益しをはりて、しかうしてのちに、滅度した
まひき。正法像法、滅盡してのち、この國土に
また、ほとけいてたまふことありき。また威音王
如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・无
上士・調御丈夫・天人師仏・世尊となづけた
てまつる。かくのごとく、次第に、二万億のほとけ
ましましき。みな、おなしく一号なり。最初の威
音王如来、すでに滅度したまひて、正法、滅
してのち、像法のなかに、増上慢の比丘、大勢
力ありき。そのときに、ひとりの菩薩比丘あり。
常不軽となづく。得大勢、なむの因縁をも
てか、常不軽となづくる。この比丘、をよそ見ると
ころあり、もしは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷
を、みなことごとく礼拝讃歎して、この言をな
さく、われ、ふかくなむぢらをうやまふ。あへて、軽
慢せず。ゆへはいかん、なむたち、みな、菩薩の道を
行じて、まさに、ほとけになることをうべければなり。
しかも、この比丘、もはら経典を讀誦せすして、たゝ
礼拝を行しき。乃至とをく、四衆を見ても、また
また、ことさらにゆきて、礼拝讃歎して、この
言をなさく、われ、あへて、なんぢらをかろしめず、
なんたち、みな、まさに、ほとけになるへきゆへに、
四衆のなかに、瞋恚をなし、こゝろ不浄なるも

」（2オ）

」（2ウ）

」（3オ）

のありて、悪口罵詈していはく、この無智の比
丘、いづれのところよりきたりてか、みつから、われ、
なんぢをかろしめずといひて、われらがために、記
をさつけて、まさに、ほとけになることをうべしと
いふ。われら、かくのことき虚妄の授記をも
ちゐず。かくのことく、多年を経歴して、つね
に罵詈せられしかとも、瞋恚をなさすして、
つねにこの言をなさく、なんち、まさに、ほとけに
なすへしと。この語をとくときに、衆人、あ
るひは、杖木・瓦石をもて、これを打擲すれと
も、さりはしりて、とをく住して、なを高聲に
となへて、いはく、われ、あへて、なむたちをかろし
めす、なんちら、みな、まさにほとけになるべし。
それ、つねにこの語をなすをもてのゆへに、
増上慢の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、これ
をなづけて、常不軽とす。この比丘をはりなむ
とせしときにのぞみて、虚空のなかにして、
つぶさに威音王佛の、さきにときたまふと
ころの法華経の、二十千万億の偈をきゝて、
こと〳〵くよく受持して、すなはち、かみのことく
眼根清浄、耳・鼻・舌・身・意根清浄をえ
つ。この六根清浄をうることをはりて、さらに、
壽命をますこと、二百万億那由他歳、ひろ
くひとのために、この法華経をときゝ。ときに、増上
慢の四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の、この

」（3ウ）

」（4オ）

」（4ウ）

ひとを軽賤して、不軽のなを為作せしもの、その大神通力・樂説辨力・大善寂力をえたるを見て、その所説をきゝて、みな信伏随從しき。この菩薩、また千万億の衆を化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめつ。命終のゝち、二千億のほとけにあふことえたり、みな日月燈明となづけたてまつりき。その法のなかにして、この法華経をとく。この因縁をもて、また、二千億のほとけにあいたてまつりき。おなじく、雲自在王となづけたてまつる。この諸佛の法のなかにして、受持讀誦し、もろ〳〵の四衆のために、この経典をとくがゆへに、これつねのまなこ、清浄に、耳・鼻・舌・身・意の諸根清浄なることえつ。四衆のなかにして、法をときしに、こゝろにおそるゝところなかりき。得大勢、この常不軽菩薩摩訶薩、かくのことき、そこばくの諸佛を供養じたてまつり、恭敬尊重讃歎し、もろ〳〵の善根をうへたり。のちにまた、千万億のほとけにあひたてまつり、また、諸佛の法のなかにして、この経典をとき、功德成就して、まさに、ほとけになることうべかりき。得大勢、こゝろにをきて、いかん。そのとき、常不軽菩薩といひし、あにことひとならむや。すなはち、わが身、これなり。もし、われ、宿世にこの経を受

」（5オ）

」（5ウ）

持讀誦し、他人のためにとかざらましかは、とく阿耨多羅三藐三菩提をうることあたはじ。われ、先佛のみもとにして、この経を受持讀誦し、ひとのためにときしがゆへに、とく、阿耨多羅三藐三菩提をえたり。得大勢、かのときの四衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、瞋恚のこゝろをもて、われを軽賤せしがゆへに、二百億劫、つねにほとけにあはず、法をきかず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄にして、大苦悩をうく。このつみをふることをはりて、また、常不軽菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提に教化せるにあひにき。得大勢、なむぢかこゝろにをきて、いかん。そのときの四衆、つねにこの菩薩をかろしめしもの、あにことひとならむや、いま、この會のなかの跋陁婆羅等の五百の菩薩、師子月等の五百の比丘尼、思佛等の五百の優婆塞、みな阿耨多羅三藐三菩提にをきて、退轉せざるもの、これなり。得大勢、まさにしるべし。この法華経は、おほきに、もろ〳〵の菩薩摩訶薩を饒益して、よく阿耨多羅三藐三菩提にいたらしむ。このゆへにもろ〳〵の菩薩摩訶薩、如来滅後に、つねにこの経を受持讀誦解説書寫すへし。そのときに、世尊、かさねてこの義をのへんとおほして、偈をときてのたまはく、

」（6オ）

」（6ウ）

」（7オ）

過去にほとけましく〳〵き。威音王となづけたてまつる。神智無量にして、一切を将導し、天人龍神の、ともに供養したてまつるところなり。このほとけの滅後に、法つきなむとせしとき、ひとりの菩薩ありき。常不軽となづく。ときに、もろ〳〵の四衆、法に計着せり。不軽菩薩、そのところにゆきいたりて、これにかたりていはく、われ、なんぢをかろしめず。なんたち、道を行じて、みな、まさに、ほとけになるべければなり。諸人きゝおはりて、軽毀し、罵詈せしに、不軽菩薩、よくこれを忍受しき。そのつみをへをはりて、命終のときにのぞみて、この経をきくことえて、六根清浄なり。神通のゆへに、壽命を増益して、また、もろ〳〵のひとのために、ひろくこの経をとく。もろ〳〵の着法の衆、みな、菩薩の教化成就して、佛道に住せしむることをかうふる。不軽、命終して、無數のほとけにあひたてまつり。この経をとくかゆへに、無量の福をゑし、やうやて、功徳を具して、とく仏道なりき。かのときの不軽は、すなはち、わか身、これなり。ときの四部衆の着法のものゝ、不軽のなんち、まさにほとけになるべしといふをきゝしは、この因縁をもて、無數のほとけにあいたてまつれり。この會の菩薩、五百の衆、あはせておよひ、四部の清信の士女の、いま、わがまへにして、法をきくもの、こ

」（7ウ）

」（8オ）

」（8ウ）

れなり。われ、前世に、このもろ〳〵のひとをすゝめて、この経の第一の法を聴受せしめ、ひとに開示し、をしへて、涅槃に住せしめ、世世にかくのことき経典を受持しき。億億万劫より、不可議にいたりて、ときに、いまし、この法華経をきくことをう。億億万劫より不可議にいたりて、諸佛世尊、ときに、この経をときたまふ。このゆへに、行者、ほとけの滅後に、かくのことき経をきゝて、疑惑をなすことなかれ。まさに、ころをひとつにして、ひろくこの経をとくべし。世世にほとけにあいたてまつりて、とく仏道ならむ。

妙法蓮華経如来神力品第二十一

そのときに、千世界、微塵等の菩薩、摩訶薩の地より涌出せるもの、みな、佛前にして、こゝろをひとつにし、たなこゝろをあはせて、尊顔を瞻仰して、ほとけにまうしてまうさく、世尊、われら、ほとけの滅後に、世尊の分身の所在の國土、滅度のところにして、まさに、ひろくこの経をとくべし。ゆへはいかん、われら、またみつからこの真浄の大法をえて、受持讀誦解説書寫して、これを供養したてまつらむとおもふ。そのときに、世尊、文殊師利等の、無量百千万億の、舊住娑婆世界の菩薩摩訶薩、をよひもろ〳〵の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・

」（9オ）

」（9ウ）

」（10オ）

天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等の一切の衆のまへにして、大神力を現したまふ。廣長舌をいだして、かみ、梵世までにいたらしめ、一切の毛孔より、無量無數色のひかりをはなちて、みな、ことゝく、あまねく十方世界をてらしたまふ。もろ〳〵の寶樹下の師子座上の諸佛も、また〳〵かくのごとく、廣長舌をいだし、無量のひかりをはなちたもふ。釋迦牟尼佛、をよひ寶樹下の諸佛、神力を現したまふとき、百千歳を満ず。しかうして、のちかへりて、舌相をおさめて、一時に聲欬し、ともに彈指したまふ。このふたつの音聲、あまねく十方の諸佛の世界にいたりて、地、みな、六種に震動す。そのなかの衆生、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、ほとけの神力をもてのゆへに、みな、この娑婆世界の無量無邊百千万億のもろ〳〵の寶樹下の師子座上の諸佛を見たてまつり、およひ釋迦牟尼佛、多寶如来とともに、寶塔のうちにまし〳〵て、師子の座に坐したまへるを見たてまつり、また、無量無邊百千万億の菩薩摩訶薩をよひもろ〳〵の四衆の、釋迦牟尼佛を恭敬し、圍繞したてまつるを見る。すでに、これを見ることをはりて、みな、おほきに歓喜

」（10ウ）

」（11オ）

して、未曽有なることえつ。すなはち、ときに、諸天、虚空のなかにして高聲にとなへて、いはく、この無量無邊百千万億阿僧祇の世界をすきて、くにあり。娑婆となづく。このなかにほとけましまします、釋迦牟尼となつけたてまつる。いまもろ〳〵の菩薩摩訶薩のために、大乗経の妙法蓮華教菩薩法仏所護念となづくるをときたまふ。なんたち、まさに、深心に随喜すべし。また、まさに釋迦牟尼佛を礼拝供養したてまつるへし。かのもろ〳〵の衆生、虚空のなかのこゑをきくことをはりて、たなこゝろをあはせ、娑婆世界にむかひて、かくのごとき言をなさく、南無釋迦牟尼佛、南無釋迦牟尼佛と。種種の華・香・瓔珞・幡・蓋、をよびもろ〳〵の嚴身の具・珍寶・妙物をもて、みな、ともに、はるかに娑婆世界に散ず。散ずるところの、もろ〳〵の十方よりきたること、たとへは、くものあつまれるかことくして、變じて寶帳となりて、あまねく、このあひだの諸佛のみうへにおほふ。ときに、十方世界、通達して無礙なること、一佛土のごとし。そのときに、ほとけ上行等の菩薩大衆につけたまはく、諸佛の神力はかくのことく、無量無邊不可思議なり。もし、われこの神力をもて、無量無邊百千万億阿

」（11ウ）

」（12オ）

」（12ウ）

僧祇劫におきて、嘱累のためのゆへに、
この経の功徳をとくとも、なをつくすこと
あたはじ。要をもて、これをいはゝ、如来の一切
の所有の法、如来の一切の自在神力、如
来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、
をば、みな、この経にをきて宣示 顕説したま
ふ。このゆへに、なんたち、如来滅後に、まさにこゝ
ろをひとつにして、受持讀誦解説書寫し、説
のことく修行すべし。所在の國土に、もし受持
しとくしゆし解説し書寫し、説のこと
く、修行することあらん。もしは、経巻所住の
ところ、もしは、そのゝなかにしてもあれ、もしは
はやしのなかにしてもあれ、もしは樹下にし
てもあれ、もしは僧坊にしてもあれ、もしは白
衣舎にもあれ、もしは殿堂にありてもあれ、
もしは山谷曠野にもあれ、このなかにみな塔を
たてゝ供養すべし。ゆへはいかん、まさにしるへ
し。このところは、すなはち、これ道場なり。諸
佛こゝにして、阿耨多羅三藐三菩提をえ
たまふ。諸佛、こゝにして、法輪を轉したまふ、
諸佛こゝにして、般涅槃したまふ。そのとき
に、世尊、かさねて、この義をのべんとおほして、
偈をときてのたまはく、
諸佛、救世者、大神通に住して、衆生をよろ

」（13オ）

」（13ウ）

」（14オ）

こばしめむかためのゆへに、無量の神力を現
したまふ。舌相、梵天までにいたり、身より無數の
ひかりをはなつ。佛道をもとむるものゝために、こ
の希有の事を現したまふ。諸佛、謦欬のみこ
ゑをよび、彈指のみこゑ、あまねく十方のく
にゝきこえて、地、みな六種にうこく。ほとけの
滅度のゝちに、よくこの経をたもたんをもて
のゆへに、諸佛みな歓喜して、無量の神力を現
したまふ。この経を嘱累せんかゆへに、受持
者を讃美すること、無量劫のなかにをきてすと
も、なをつくすことあたはじ。このひとの功徳は
ほとりなく、きはまりあることなけむ。十方の
虚空の、邊際をうべからざるがごとし。よく、この
経をたもたんものは、すなはち、すてにわれをみ、
また多寶佛、をよびもろ〳〵の分身者を見、また、
わか、今日教化せるもろ〳〵の菩薩を見るに、な
りなむ。よくこの経をたもたんものは、われ、をよび
分身、滅度の多寶佛をして、一切みな、歓喜
せしめん。十方現在のほとけあはせて、過去未
来をまたみ、また供養したてまつり、また
歓喜することえしめむ。諸佛の道場に坐し
て、ゑたまへるところの秘要の法、よくこの経
をたもたんものは、ひさしからずして、また、ま
さにうべし。よく、この経をたもたんものは、諸

」（14ウ）

」（15オ）

法の義、名字をよひ言辞にをきて、樂説窮盡なきこと、かぜの空中にして、一切障礙なきかことくならむ。如来滅後に、ほとけの所説の経の因縁、をよび次第をしりて、義にしたがひて、實にごとくにとかん。日月の光明のよくもろ〳〵の幽冥をのそくがごとし。このひと、世間に行して、よく衆生の闇を滅し、無量の菩薩ををしへて、畢竟して一乘に住せしめん。このゆへに、有智のもの、この功徳の利をきゝて、わか滅度のゝちに、この経を受持すへし。このひとは、佛道にをきて、決定してうたかひあることなけむ。

妙法蓮華経 嘱累品第二十二

そのときに、釋迦牟尼佛、法座よりたちて、大神力を現じたまふ。みぎのみてをもて、無量の菩薩摩訶薩のいたゝきをなでゝ、この言をなしたまひて、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき、阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもて、なんだちに付嘱す。なんだち、まさにこゝろをひとつにして、この法を流布し、ひろく増益せしむへし。かくのごとく、みたびもろ〳〵の菩薩摩訶薩のいたゝきをなでゝ、このことばをなしたまはく、われ、無量百千万億阿僧祇劫に、このえがたき

」（15ウ）

」（16オ）

」（16ウ）

阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。いまもてなんたちに付嘱す。なんたち、まさに、受持讀誦し、ひろくこの法をのべて、一切衆生をして、普得聞知することをゑしむへし。ゆへはいかん、如来は大慈悲まします。もろ〳〵の慳怪なく、またおそるゝところなし。よく、衆生にほとけの智恵、如来の智恵、自の智恵をあたへたまふ。如来は、この一切衆生の大施主なり。なんたち、またしたがつて、如来の法を學すへし。慳怪を生ずることなかれ。未来世にをひて、もし善男子・善女人あつて、如来の智恵を信ぜんものには、まさにために、この法華経を演説して、聞知することをえしむべし。そのひとをして、佛恵をえしめんがためのゆへなり。もし衆生あつて、信受せずんば、まさに如来のよの深法のなかにをひて、示教利喜すべし。なむだち、もしよくかくのことくせは、すなはち、すでにもろ〳〵のほとけの恩を報じたてまつるとす。ときにもろ〳〵の菩薩摩訶薩、ほとけこの説をなしたまふをきゝおはりて、みなおほきによろこび、よろこふことその身に遍満しぬ。まさに恭敬をくわへて、身をまげ、かうへをうなたれ、たなこゝろをあはせて、ほとけにむかひたてまつりて、ともに、こゑをおこしてまうさく、

」（17オ）

」（17ウ）

」（18オ）

世尊の勅のごとく、まさにつぶさに奉行すべし。たゝししかれり。世尊ねかはくは、うらおもひたまふことましまさゞれ。もろ〳〵の菩薩摩訶薩の衆、かくのごとく、三反ともにこゑをおこしてまうさく、世尊の勅のごとく、まさにつぶさに奉行すべし。たゝししかなり。世尊、ねかはくは、うらおもひたまふとましまさゞれ。そのときに、釋迦牟尼佛、十方よりきたりたまへるもろ〳〵の分身のほとけをして、をの〳〵本土にかへらしめたまはんとして、この言をなしたまふ。諸佛、をの〳〵所安にしたがひたまへ。多寶佛塔かへりて、もとのごとくましますべし。この語をときたまふとき、十方の無量の分身の諸佛の寶樹下の師子の座のうへに坐したまへるもの、をよひ多寶佛あはせて上行等の、無邊阿僧祇の菩薩大衆、舎利弗等の聲聞四衆、をよび一切世間の天・人・阿脩羅等、ほとけの所説をきゝたまひて、みなおほきに歓喜し

」（18ウ）

き。

妙法蓮華経藥王菩薩本事品第二十三

そのときに、宿王華菩薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊、藥王菩薩はいかにしてか婆婆世界にあそぶ。世尊、この藥王菩薩そこばくの百千万億那由他の難行苦行います。よきかな。世尊、ねかはくは、すこしき解説したまへ。諸

」（19オ）

」（19ウ）

天、龍神・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、また他の國土の諸来の菩薩、をよびこの聲聞衆きゝて、みな、歓喜せん。そのときに、ほとけ、宿王華菩薩につげたまはく、乃往過去無量恒河沙劫に、ほとけましましき。日月浄明徳如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊となづく。そのほとけに八十億の大菩薩摩訶薩・七十二恒河沙の大聲聞衆ありき。ほとけのいのちは、四万二千劫なり。菩薩の壽命もひとしかりき。かのくにゝは、女人・地獄・餓鬼・畜生阿脩羅等、をよびもろ〳〵の難あることなし。地のたいらかなること、たなこゝろのごとくして、瑠璃になされたり。寶樹荘厳して、寶帳をうへにおほひ、たからの華幡をたれ、寶瓶・香爐國界に周遍せり。七寶をうてなとして、ひとつのきひとつの喜あり。そのき、うてなをさること、盡一箭道なり。このもろ〳〵の寶樹にみな菩薩聲聞ありて、そのもとに坐せり。もろ〳〵の寶臺のうへに、をの〳〵百億の諸天ありて、天の妓樂をなし、ほとけを歌歎して、もて供養をなしき。そのときにかのほとけ、一切衆生憙見菩薩、をよびもろ〳〵の菩薩、もろ〳〵の聲聞衆のために、法華経をときたまひき。この一切衆生

」（20オ）

」（20ウ）

憙見菩薩　ねがひて苦行をならひ、日月浄明
徳佛の法のなかにして、精進経行し、一心にほと
けをもとむること、万二千歳を満しをはりて、
現一切色身三昧をえてき。この三昧をゑをは
りて、こゝろおほきに歓喜して、すなはち、念言
をなさく、われ、現一切色身三昧をゑたること、みな
これ法華経をきくことをゑたるちからなり。われ、いま
まさに日月浄明徳佛、をよひ法華経を供養
したてまつるべし。すなはちのときに、この三昧
にいたりて、虚空のなかより、曼陁羅華・摩訶
曼陁羅華・細抹の堅黒栴檀をふらして、虚
空のなかにみて、くものごとくにしてくだし、ま
た、海此岸栴檀の香をふらしき。この香、六銖は
價直、娑婆世界なり。もてほとけに供養した
てまつる。この供養をなすことをはりて、三昧よりた
ちて、みつから念言すらく、われ、神力をもて
ほとけを供養したてまつるといへとも、しか
じ。みをもて供養したてまつらんには。すな
はち、もろ〳〵の香・栴檀・薫陸・兜樓婆・畢力
迦・沈水・膠香を服し、また瞻蔔のもろ〳〵
の華香油をのむこと、千二百歳を満じ
をはりて、香油をみにぬりて、日月浄明徳佛
のみまへにして、天の寶衣をもて、みつから、み
にまつひをはりて、もろ〳〵の香油をそゝき、

」（21オ）

」（21ウ）

」（22オ）

神通力の願をもて、みつからみをとほしき。光
明あまねく、八十億恒河沙の世界をてらす。
そのなかの諸佛、同時にほめてのたまはく、よ
きかな〳〵、善男子。これ、まことの精進なり、これ
を真法をもて、如来を供養したてまつる
となづく。もし、華・香・瓔珞・焼香・抹香・塗香
と天繪幡蓋、をよひ海此岸栴檀の香、かくの
こときらの種種のもろ〳〵のものをもて、供養
すとも、をよぶことあたはさるところなり。たとひ
國城妻子をもて布施すとも、また、をよはざる
ところなり。善男子、これを第一の施となづく。
もろ〳〵の施のなかにをきて、最尊最上なり。法
をもて、もろ〳〵の如来を供養したてまつるかゆへに、こ
の語をなしをはりて、をの〳〵黙然したまひき。
その身のひにもゆること、千二百歳、これをすぎ
て已後、その身、すなはち、つきぬ。一切衆生喜
見菩薩、かくのことき、法の供養をなしをはりて、
命終のゝちに、また日月浄明徳佛のくにの
なかに生ぜりき。浄徳王のいゑにして、結跏趺
坐して、忽然に化生じ、すなはち、そのちゝのために
しかも、偈をときていはく、
大王、いままさにしろしめすべし。われ、かのところ
に経行して、すなはちのときに、一切現諸身三昧
をえ、つめとめて、大精進を行じて、所愛の身を

」（22ウ）

」（23オ）

」（23ウ）

すてき。この偈をときをはりて、ちゝにまうしてまうさく、日月浄明徳佛、いまなを現にまします。われ、さきに、ほとけを供養したてまつりをはりて、解一切衆生語言陁羅尼をえたり。また、この法華経の八百千万億那由他・甄迦羅・頻婆羅・阿閦婆等の偈をきけり。大王、われ、いままさにかへりて、また此ほとけを供養したてまつるべしと。まうしをはりて、すなはち、七寶の臺に坐して、虚空に上昇すること、たかさ七多羅樹、ほとけのみもとに、ゆきいたりて、頭面にみあしを礼し、十指のつめをあはせて、偈をもてほとけをほめたてまつる。

容顔はなはだ奇妙にして、光明十方をてらしたまふ。われむかし供養したてまつる。いま、よくかへりて、親近したてまつる。そのときに、一切衆生憙見菩薩、この偈をとくことをはりて、ほとけにまうしてまうさく、世尊、世尊、なをよにましませ、そのときに、日月浄明徳佛、一切衆生憙見菩薩につげたまはく、善男子、われ、涅槃ときいたり、滅盡ときいたれり。なんぢ、牀座を安施すべし、われ、今夜におきて、まさに般涅槃すべし。また、一切衆生憙見菩薩に勅したまはく、善男子、われ佛法をもて、なんちに嘱累す。をよひもろ〳〵の菩薩大弟子あはせて、阿耨多羅三藐三菩提の法、また三千大千七寶世界のもろ〳〵の寶樹寶臺、をよび給侍の諸天をもてこと〳〵く、なんちにつく。わが滅度のゝち、所有の舎利またなんちに付嘱す。まさに流布せしめひろく供養をまうけ、そこばくの千の塔をたつべし。かくのごとく、日月浄明徳佛、一切衆生喜見菩薩に勅したまふことをはりて、よの後分に涅槃にいたりたまひぬ。そのときに、一切衆生喜見菩薩、ほとけの滅度を見て、非感懊悩して、ほとけを戀慕したてまつる。すなはち、海此岸栴檀をもて、つみぎとして、佛身を供養してもて、これをやきたてまつる。ひ滅しをはりてのちに、舎利をひろひとりて、八万四千の寶瓶をつくりて、もて八万四千の塔をたつること、たかさ三世界、表刹荘厳して、もろ〳〵の幡蓋をたれ、もろ〳〵の寶鈴をかけたり。そのときに、一切衆生喜見菩薩、またみつから念言すらく、われこの供養をなすといへとも、こゝろなをいまたたらす、われいままさにさらに舎利を供養したてまつるべし。すなはちもろ〳〵の菩薩大弟子をよび天龍夜叉等、一切の大衆にかたらはく、なんだちまさに一心に念すへし。われ、いま日月浄明徳仏の舎利を供養したてまつらん。この語をなしをはりて、すなはち八万四千の塔のまへにして、百福荘厳のひちをとぼすこと、七万二千歳、しかうしてもて供養したてまつる。無數の聲

」（24オ）

」（24ウ）

」（25オ）

」（25ウ）

」（26オ）

聞をもとむる衆、無量阿僧祇のひとをして、阿耨多羅三藐三菩提心をおこさしめ、みな現一切色身三昧に住することをえしめつ。そのときにもろ〳〵の菩薩大人阿脩羅等、そのひぢなきを見て、憂悩悲哀して、このこの言をなさく、この一切衆生喜見菩薩は、これわれらが師なり。われを教化したまふものなり。しかあるに、いまひぢをやきて、身具足したまはず。ときに、一切衆生喜見菩薩、大衆のなかにして、この誓言をたつ、われふたつのひぢをすてゝ、かならず、まさにほとけの金色の身をうべし。まことにして、むなしからずは、わかふたつのひちをして、還復することもものごとくならしめよ。このちかひをなしおはりて、自然に還復しき。この菩薩の福徳・智惠淳原なるによりて、いたすところなり。そのときにあたりて、三千大千世界六種に震動し、天より寶華ふり、一切の天人未曽有なることをえてき。ほとけ宿王華菩薩につげたまはく、なんぢ、こゝろにをきていかん。一切衆生喜見菩薩あにことひとならんや。いまの藥王菩薩これなり。その身をすてゝ布施せるところ、かくのごとく、無量百千万億那由他數なり。宿王華、もし發心して、阿耨多羅三藐三菩提をえんと思ふことあらんものは、よくてのゆび、乃至あしのひとつのゆびをとぼして、佛塔に供養したて

」（26ウ）

」（27オ）

」（27ウ）

まつれ。國城妻子、をよび三千大千國土の山林河池、もろ〳〵の珎寶物をもて供養せんものにまさらん。もしまたひとありて、七寶をもて、三千大千世界にみてゝ、ほとけをよび大菩薩・辟支佛・阿羅漢に供養せん。このひとの所得の功徳にはしかじ。この法華経の乃至一四句偈を受持せんには、その福もとおほし。宿王華、たとへは、一切の川流江河諸水のなかに、海を第一とするかごとく、この法華経もまた〳〵かくのごとし。もろ〳〵の如来の所説の経のなかにをきて、もとも深大なりとす。また土山・黒山・小鐵圍山・大鐵圍山、をよひ十寶山、衆山のなかに、須弥山第一たるかごとく、この法華経もまた〳〵かくのごとし。諸経のなかにをきて、もともそのかみたり。また衆星のなかに、月天子もとも第一たるかごとく、この法華経もまた〳〵かくのごとし。千万億種のもろ〳〵の経法のなかにをきて、もとも照明なりとす。また日天子のよくもろ〳〵の闇をのぞくがごとし。この経もまた〳〵かくのごとし。よく一切の不善の闇を破す。またもろ〳〵の小王のなかに、轉輪聖王もとも第一たるがごとく、この経もまた〳〵かくのごとし。もろ〳〵の経のなかにをきて、もともその尊たり。また帝釋の三十三天のなかにをきて、王なるがごとく、この経もまた〳〵かくのごとし。諸経の

」（28オ）

」（28ウ）

なかの王なり。また大梵天王の一切衆生のちゝなるかごとく、この経もまた〳〵かくのごとし。一切の賢聖學無學、をよひ菩薩のこゝろをおこせるものゝちゝなり。また一切の凡夫人のなかに、須陁洹斯陁含・阿那含・阿羅漢・辟支佛、第一たるかごとく、この経もまた〳〵かくのごとし。一切の如来の所説、もしは、菩薩の所説、もしは聲聞の所説、もろ〳〵の経法のなかにもとも第一たり。よくこの経典を受持することあるものもまた〳〵かくのことし。一切衆生のなかにをきて、また第一たり。一切の聲聞・辟支佛のなかに、菩薩第一たり、この経もまた〳〵かくのことし。一切のもろ〳〵の経法のなかにをきて、もとも第一たり。ほとけ諸法の王とましますがことく、この経もまた〳〵かくのことし。諸経のなかの王なり。宿王華、この経はよく一切衆生をすくうものなり。この経はよく一切衆生をして、もろ〳〵の苦悩をはなれしめたまふ。この経はよくおほきに、一切衆生を饒益して、その願を充満したまふ。清涼のいけのよく一切のもろ〳〵の渇乏のものにみつるかごとく、さむきもののひをゑたるかごとく、はだかなるものゝころもをえたるかごとく、あきひとのぬしをえたるかごとく、この母をえたるがごとく、わたりにふねをゑたるがごとく、やまひにくすしをえたるかごとく、くらきにとほしびをえたるがごとく、まどしきにたから

」（29オ）

」（29ウ）

」（30オ）

をゑたるがことく、たみの王をえたるかことく、賈客のうみをえたるかことく、とほしひの闇をのぞくがごとく、この法華経もまた〳〵かくのごとし。よく衆生をして、一切の苦一切の病痛をはなれ、よく一切の生死の縛をとかしめたまふ。もしひとこの法華経をきくことをえて、もしはみつからかきもしはひとををしへてもかゝしめむ。所得の功徳は、ほとけの智惠をもて、多少を籌量するとも、そのほとりをゑじ。もしこの経巻をかきて、華・香・瓔珞・燒香・抹香・塗香・幡蓋・衣服・種種のとほしび・蘇燈・油燈・諸香油燈・瞻蔔油燈・偵曼那油燈・波羅羅油燈・波利師迦油燈・那波摩利油燈をもて供養せん。所得功徳また〳〵無量ならん。宿王華、もしひとありてこの藥王菩薩本事品をきかんものは、また無量無邊の功徳をえん。もし女人ありて、この藥王菩薩本事品をきゝて、よく受持せは、この女身をつくして、のちにまたうけし。もし如来滅後のちの五百歳のなかに、もし女人ありて、この経典をきゝて、説のことく修行せは、こゝに命終して、すなはち、安樂世界の阿弥陁佛の大菩薩衆に圍繞せられたまへる住處にゆきて、蓮華のなかの寶座のうへに生ぜん。また貪欲のためになやまされし。また〳〵瞋恚・愚癡のためになや

」（30ウ）

」（31オ）

」（31ウ）

まされし。また〳〵憍慢・嫉妬・諸垢のためになやまされし。菩薩の神通無生法忍をえむ。この忍をうることをはりて、眼根清浄ならん。この清浄の眼根をもて、七百二千億那由他恒河沙等の諸佛如来を見たてまつらん。このときに諸佛、はるかにともにほめてのたまはく、よきかな〳〵、善男子、なんぢよく釋迦牟尼佛の法のなかにして、この経を受持し讀誦し思惟し、他人のためにとける。所得の福徳無量無邊なり。ひもやくことあたはじ、みづもたゝよはすことあたはじ。なんちが功徳をは、千佛ともにときたまふとも、つくさしむること、あたはじ。なんちいますでによくもろ〳〵の魔賊を破し、生死のいくさをやぶり、諸餘の怨敵をもみなこと〳〵く摧滅しつ。善男子、百千の諸佛神通力をもちてともになんちを守護したまふ。一切世間天人のなかにをきてなんちにしくものあることなし。たゞし如来をのそきたてまつりてそのもろ〳〵の聲聞・辟支佛・乃至菩薩の智惠・禅定なんぢとひとしきものあることなし。宿王華、この菩薩はかくのごとき功徳智慧のちからを成就せり。もしひとありて、この薬王菩薩本事品をきゝて、よく随喜し讃善せんは、このひと現世にくちのなかよりつねに青蓮華のかほいだし、身の毛孔のなかより、つねに牛頭栴檀のかほいださん。

」（32オ）

」（32ウ）

」（33オ）

所得の功徳はかかみの所説のごとし。このゆへに、宿王華、この薬王菩薩本事品をもてなんちに嘱累す。わか滅度ののち〳〵の五百歳のなかに、閻浮提に廣宣流布して、断絶せしめ、悪魔・魔民、もろ〳〵の天龍夜叉・鳩槃荼等をして、そのたよりをえせしむることなかれ。宿王華、なんちまさに神通のちからをもて、この経を守護すべし。ゆへはいかん。この経はすなはち、閻浮提のひとのやまひの良薬たり。もしひとやまひあらんに、この経をきくことえば、やまひすなはち消滅して、不老不死ならん。宿王華、なんちもしこの経を受持することあらんものを見ては、青蓮華をもて抹香をもりみて、そのうへに供養すべし。散しをはりて、この念言をなせ、このひとは、ひさしからすして、かならすまさにくさをとりて、道場に坐してもろ〳〵の魔軍をやぶるへし。まさに法のかいをふき、大法のつゝみをうちて、一切衆生の老病死海を度脱すべし。このゆへに、佛道をもとめんもの、この経典を受持することあらむひとを見ては、まさにかくのごとく、恭敬のこゝろをなすべし。この薬王菩薩本事品をときたまひしときに、八万四千の菩薩、解一切衆生語言陁羅尼をえつ。多寶如来宝塔のうちにして、宿王華菩薩をほめてのたまはく、よきかな〳〵、宿王華、なんぢ不可思議の功

」（33ウ）

」（34オ）

徳を成就して、すなはち、よく釋迦牟尼佛に
かくのごときのことをとひたてまつりて、無量の一切
衆生を利益す。
妙法蓮華経妙音菩薩品第二十四
そのときに、釋迦牟尼佛、大人相の肉髻光明
をはなち、をよび眉間白毫相のひかりをはなちて、
あまねく東方百八万億那由他恒河沙等の諸佛
の世界をてらしたまふ。このかずをすぎをはりて、世界
あり。浄光荘厳となづく。そのくにゝほとけましま
す。浄華宿王智如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世
間解・無上士・調御丈夫・天人師佛・世尊となづく。無
量無邊の菩薩大衆のために恭敬し圍繞せら
れたまひて、ために法をときたまふ。釋迦牟尼
佛の白毫の光明あまねくそのくにをてらした
まふ。そのときに、一切浄光荘厳國のなかに、ひと
りの菩薩あり。なを妙音といふ。ひさしくすて
にもろ〳〵の德本をうへて、無量百千万億の諸仏を
供養し、親近したてまつり、しかうして、こと
ごとく、甚深の智惠を成就し、妙幢相三昧・法花
三昧・浄德三昧・宿王戯三昧・無縁三昧・智印三昧・解
一切衆生語言三昧・集一切功德三昧・清浄三昧・神
通遊戯三昧・惠炬三昧・荘厳王三昧・浄光明三
昧・浄蔵三昧・不共三昧・日旋三昧をえたり。かくのごと
きらの、百千万億恒河沙等の諸大三昧をえたり。
釋迦牟尼佛のひかり、その身をてらしたまふ。すなは

」（34ウ）

」（35オ）

」（35ウ）

ち、浄花宿王智佛にまうしてまうさく、世尊、わ
れ、まさに娑婆世界に往諸して、釋迦牟尼佛を
礼拝し、親近供養したてまつる。をよひ文殊師利
法王子菩薩・藥王菩薩・勇施菩薩・宿王華菩
薩・上行意菩薩・荘厳王菩薩・藥上菩薩
そのとき、浄華宿王智佛、妙音菩薩につ
げたまはく、なんぢ、かのくにをかろしめて、下劣
のおもひをなすことなかれ。善男子、かの娑婆世
界は高下不平にして、土石・諸山あり。穢悪充満
し、佛身卑小なり。もろ〳〵の菩薩衆もそのかた
ちまたちいさし。しかるに、なんぢが身は、四万二千
由旬、わが身は六百八十万由旬なり。なんぢが身は第
一端正なり。百千万の福ありて、光明殊妙なり。
このゆへに、なんぢゆきて、かのくにもしは
ほとけ、菩薩をよひ國土に、下劣のおもひをな
し、かろしむることなかれ。妙音菩薩、そのほとけ
にまうしてまうさく、世尊、われいま娑婆世界に
いたらむこと、みなこれ如来のちから、如来の神通
遊戯如来の功德智惠荘厳ならむ。こゝに、妙音
菩薩、座をたゝず、身動揺せずして、三昧に
ゐる。三昧のちからをもて、耆闍崛山にをきて、法
座をさることをからすして、八万四千の衆寶
蓮華を化作す。閻浮檀金をくきとし、白
銀を葉とし、金剛をひげとし、甄叔迦寶を
もて、その臺とせり。そのときに、文殊師利法王

」（36オ）

」（36ウ）

」（37オ）

子、この蓮華を見て、ほとけにまうしてまうさく、世尊、このなむの因縁ありてか、まつこの瑞を現ぜる。そこばくの、千万の蓮華ありて、閻浮檀金をくきとし、白銀を葉とし、金剛をひけとし、甄叔迦寶をもて、その臺とせり。そのときに釋迦牟尼佛、文殊師利につけたまはく、これ妙音菩薩摩訶薩の浄華宿王智佛のくにより、八万四千の菩薩のために、圍繞せられて、この娑婆世界に来至して、われを供養し、親近礼拝せんとおもひ、また法華経を供養し、きゝたてまつらんとおもへるなり。文殊師利、ほとけにまうしてまうさく、世尊この菩薩は、なむの善本をうへなんの功徳を修してか、しかもよくこの大神通力ある、いつれの三昧をか行する。ねかはくは、われらかためにこの三昧の名字をときたまへ。われらまたつとめて、これを修行せんと思ふ。この三昧を行して、すなはちよくこの菩薩の色相の大小・威儀・進止を見ん。たゞし、ねかはくは、世尊神通力をもて、かの菩薩をきたらしめて、われをしてみることをえしめたまへ。そのときに釋迦牟尼佛、文殊師利につけたまはく、これひさしく滅度の多寶如来、まさになんぢかためにしかもその相を現したまふへしと。ときに多寶佛、かの菩薩につげたまはく、善男子きたりて、文殊師利法王子なんちが身を見んとおもへる。ときに妙音菩薩、かのくにより湿没して、八万四千の菩薩とともに

」（37ウ）

」（38オ）

」（38ウ）

發来す。所経のもろ〳〵のくに六種に震動して、みなこと〳〵く、七寶の蓮華をふらし、百千の天の樂うたさるに、をのづからなる。この菩薩のめは、廣大の青蓮華の葉のことし。たとひ百千万のつきを和合せらん。その面猊端正なることまたこれにすぎたり。この身は真金のいろにして、無量百千の功德荘厳せり。威德熾盛にして、光明照曜し、諸相具足して、那羅延固の身のことし。七寶の臺にいりて、虚空に上昇せり。地をされること、七多羅樹もろ〳〵の菩薩衆恭敬し圍繞して、この娑婆世界の耆闍崛山に来詣しぬ。いたりをはりて、七寶の臺よりおりて、價直百千の瓔珞をもたもちて、釋迦牟尼佛のみもとにいたりぬ。頭面にみあしを礼して瓔珞を奉上す。しかふして、ほとけにまうしてまうさく、世尊、浄華宿王智佛、世尊を問訊したまふ、少病少悩起居軽利にして、安樂に行したまふやいなや。四大調和しましますやいなや。世の事しのびたまひつべしやいなや。衆生は度しやすしやいなや。貪欲・瞋恚・愚癡・嫉妬・慳慢おほきことなしやいなや。父母を孝せさることなしやいなや。沙門をうやまはず、邪見なることなしやいなや。善心ありやいなや。五情を攝すやいなや。世尊、衆生はよくもろ〳〵の魔怨を降伏するやいなや。ひさしく滅度の多寶如来、七寶の塔のうちにまし〳〵て、

」（39オ）

」（39ウ）

きたりて法きゝたまふやいなや。また多寶如来を問訊したまふ、安穏少悩にして、堪忍しひさしく住したまふやいなや。世尊、われ多寶佛の身を見たてまつらんと思ふ。たゞし、ねかはくは世尊、われにしめして見せしめたまへ。そのときに釋迦牟尼佛、多寶仏にかたりたまはく、この妙音菩薩あひ見たてまつるえんをおもへり。ときに多寶佛、妙音につけてのたまはく、よきかな〳〵、なんぢよく釋迦牟尼佛を供養したてまつり、をよひ法華経をきゝあはせて、文殊師利等を見んかために、ことさらこゝに来至せり。そのときに華德菩薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊、この妙音菩薩は、なんの善根をうへ、なんの功德を修してか、この神力ある。ほとけ華德菩薩につけたまはく、過去にほとけまし〳〵き、雲雷音王・多陁阿伽度・阿羅呵三藐三佛陀となづけたてまつる。くにを現一切世間となつけ、劫をは喜見となづく。妙音菩薩万二千歳にをきて、十万種の妓樂をもて、雲雷音王佛に供養したてまつり、あはせて、八万四千の七寶の鉢を奉上しき。この因縁果報をもて、いま浄華宿王知佛のくにゝ生じてこの神力あり。華德、なんぢがこゝろにをきて、いかん、そのとき雲雷音王佛のみもとに、妙音菩薩とし妓羅をもて供養し、寶器を奉上せしもの、あにことひとならんや。いまこの妙音菩薩摩訶薩これなり。華

」（40オ）

」（40ウ）

」（41オ）

德、この妙音菩薩はむかし無量の諸佛に供養し親近して、ひさしく德の本をうへたり。また恒河沙等の百千万億那由他のほとけにあへり。華德、なんちたゝ妙音菩薩はその身こゝにあるとみる。しかも、この菩薩、種種の身を現して、處處にもろ〳〵の衆生のために、この経典をとく。あるひは梵王の身を現じ、あるひは帝釋の身を現し、あるひは自在天の身を現し、あるひは、大自在の身を現し、あるひは、天大将軍の身を現し、あるひは毘沙門天王の身を現し、あるひは轉輪聖の身を現し、あるひはもろ〳〵の小王の身を現し、あるひは長者の身を現し、あるひは居士の身を現し、あるひは宰官の身を現し、あるひは婆羅門の身を現し、あるひは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の身を現し、あるひは長者居士の婦女身を現し、あるひは宰官の婦女の身を現し、あるひは婆羅門の婦女の身を現し、あるひは童男童女の身を現し、あるひは天・龍・夜叉・乾闥婆・阿脩羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人の身を現して、この経をとく。諸有の地獄・餓鬼・畜生、をよびもろ〳〵の難處みなよく救濟す。乃至王の後宮にして、變じて女身となりて、この経をとく。華德、この妙音菩薩は、よく婆婆世界のもろ〳〵

」（41ウ）

」（42オ）

」（42ウ）

の衆生を救護するものなり。この妙音菩薩は
かくのことく種種に變化し、身を現して、この
娑婆國土にありて、もろ〳〵の衆生のために、この
経典をとくに、神通・變化・智惠にをきて、損減す
るところなし。この菩薩は、若干の智惠をもて、あ
きらかに娑婆世界をてらして、一切衆生をし
て、をの〳〵所智をえしむ。十方恒河沙の世界の
なかにしても、また〳〵かくのことし。もし聲聞のかた
ちをもて、得度すべきものには、聲聞のかたちを
現してために法をとく。辟支佛のかたちをも
て得度すべきものには、辟支佛のかたちを現し
てために法をとく。菩薩のかたちをもて得度
すへきものには、菩薩のかたちを現してために
法をとく。ほとけのかたちをもて、得度すへきも
のには、すなはちほとけのかたちを現してために法
をとく。かくのことく種種に度すべきところのものに
したかひてためにかたちを現す。乃至滅度をもて
得度すべきものには、滅度を示現す。華德、妙音
菩薩摩訶薩は大神通智惠のちからを成就せ
ること、その事かくのことし。そのときに、華德菩
薩、ほとけにまうしてまうさく、世尊この妙音
菩薩はふかく善根をうゑたり。世尊、この菩薩は
いつれの三昧に住してか、よくかくのことく、變現
するところありて、衆生を度脱したまふ。ほとけ、

」（43オ）

」（43ウ）

華德菩薩につけたまはく、善男子、その三昧をは
現一切色身となづく。妙音菩薩、この三昧のなかに住し
て、よくかくのことく無量の衆生を饒益す。この妙音
菩薩品をときたまふときに、妙音菩薩とともにきた
れるもの、八万四千人みな現一切色身三昧をえつ。こ
の娑婆世界の、無量の菩薩、またこの三昧をよひ
陁羅尼をえつ。そのときに、妙音菩薩摩訶薩、釋
迦牟尼佛、をよひ多寶佛塔を供養したてまつ
ることをはりて、本土還帰す。所経のもろ〳〵の國六
種に震動して、寶蓮華をふらし、百千万億の種
種の妓樂をなす。すでに本國にいたりて、八万四千の菩
薩のために、圍繞せられて、浄華宿王智佛のみも
とにいたりて、ほとけにまうしてまうさく、世尊、わ
れ娑婆世界にいたりて、衆生を饒益し、釋迦牟尼
佛を見たてまつり、をよひ多寶佛塔をみたてまつりて
礼拝供養し、また文殊師利法王子菩薩を見、を
よび藥王菩薩・得勤精進力菩薩・勇施菩薩等
を見つ。また、この八万四千の菩薩をして、現一切色身
三昧をえしめつ。この如音菩薩来往品をときたま
ひしときに、四万二千の天子は、無生法忍をえ、華德
菩薩は法華三昧をえてき。

妙法蓮華経巻第七

」（44オ）

」（44ウ）

」（45オ）

」（45ウ）